
見習い探偵 佐々木健一の大事件

日頃寝 ハル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

見習い探偵 佐々木健一の大事件

【Nコード】

N2012P

【作者名】

日頃寝 ハル

【あらすじ】

見習い探偵 佐々木健一くんの大事件。大学の頃から付き合っていた美穂と最近仕事が忙しく、なかなか会えない。そんなある日、仕事の途中で美穂を見かけた。美穂は男と腕を組んでいて……

大学を卒業して、俺はある探偵事務所に就職した。

就職先がなかなか決まらず、このままフリーターかニートになるしかないのかと悩んでいたとき、友達の知り合いの探偵事務所を経営しているある人から声を掛けてもらったのだ。

もちろん、自分に探偵の素質があると思われたのではなく、ただ単に英語ができる人材が欲しかったからだ。と就職してから言われた。

探偵。俺が思うような、小説に出てくる事件など一切扱わない。

素行調査、ペットの搜索、そんな家庭的な事件ばかりだ。

家庭の事情ばかり見せられて、うんざりすることもある。

ただどとうにかやっている。そんな毎日。

「健一。最近忙しくて全然遊んでくれない」

「今遊んでいるじゃねーか」

久しぶりの美穂とのデート。確かに最近は何かと仕事が忙しくなくなか二人で会えない。

だからといって折角のドライブの途中に言うか。

「この前デートしたのは先々週だよ」

「ごめん」

忙しいんだよ。しょうがないじゃないか。

尾行相手が週休二日で外に出ないわけがない。

ペットは土日関係なくいなくなる。

基本的には年中無休の探偵業。休みが計画的に取れるわけがない。

「もう、いいよ」

「うん。ごめんな」

最近美穂と明るい会話ができない。

「海空いてるといいなー」

「うん」

うんざりする。何回この猫は迷子になっているんだ。

俺が働いて3ヶ月目で5回は迷子になっている猫がまた行方不明に三毛猫。メス。赤い鈴を着けている。名前はみーちゃん。

社長が「お得意さんから依頼だよ」と言いながら写真を渡してきた時に嫌な予感がしたんだ。

みーちゃんは写真の中で、ふてぶてしい顔をして日向ぼっこしている。

「またですか」

ついこぼれた俺の言葉に、ファンキーな社長はニヤニヤと笑いながら「頼むよ」と言った。

俺の手元には犬の写真が一枚。猫が二枚。インコが一枚。

ブラブラと近所を探す。

それでも今日は誰かを尾行しないだけマシだ。

今は夏で。そう言えば、美穂の誕生日がもうすぐだ。

美穂とは最近会ってない。

事務所の近くの公園、依頼人の家の近くの公園を探して、もう少し遠出して今日は街まで出てみようか。と思った。

最近仕事が忙しい。

さわやかな初夏の陽気の中ペットの搜索をしながら、あれ？ あんまり忙しくないかも。と思った。

一日中は無理でも案外暇な時間はある。今とか。

駅前まで来てみた。社長からはお昼には一回戻るように言われている。

まだ時間がある。

ブラブラしてたら先週まで尾行していた、オジサンを見かけた。

奥さんから浮気を疑われてて、でも二週間尾行して疑いは晴れた。

オジサンは仕事帰りにアルバイトをしていて、帰りが遅かったただけだった。

奥さんに心配を掛けたくなくて、勤務時間を減らされたことを言わず、工事現場でアルバイトをしていた。

オジサンはスーツを着て、キビキビと歩いていた。

駅にはたくさん人がいる。

ひょんなことから探偵事務所を訪れる人。

一人ひとりが悩みを抱えて、探偵に助けを求める。

しかし誰もがこうして生活していて、周りの幸せを感じたり感じなかったりして駅前を歩いている。

美穂がいた。

美穂は男と腕を組んで歩いていた。

「あゝあ」

事務所の戸を開けるなり声が思わず漏れてしまった。

「どうしたの？ 佐々木くん」

社長がニヤニヤしながら言った。

声を掛けられなかった。

美穂。誰だあれは。

美穂は制服だったから仕事の途中だろう。

でも相手は私服だった。ジーパンにＴシャツ。

美穂はアイツに会うために仕事を抜けたのだろうか。

「お疲れてるねえ。みーちゃんは見つかった？」

社長は、机に突っ伏してうなだれている俺の肩を揉んだ。

みーちゃんどころじゃないよ。美穂……

気分は晴れない。

理由は分かっている。俺が美穂に何も聞けないからだ。

「今日も猫探しっすか」

社長は今日も笑いながら「頼むよ」と言って俺を送り出した。

昨日から写真は増えていない。

でも今日は公園に寄らない。

美穂の会社にまっすぐ向った。

犬猫鳥の搜索は、美穂の浮気疑惑が晴れるまでおあずけだ。

「マテ……」

口の中で呟いた。

美穂の浮気は俺にとっての大事件だ。

美穂の会社の前に来た。

しかし俺は美穂に連絡を取るようなことはしない。

美穂は仕事しているだろうし。

俺の計画はこうだ。

美穂はきつと今日のお昼休み、アイツと会う。

昨日は昼休み前にアイツと会っていた。

あまり合う時間はなかったはずだ。だから今日また会っだろう。

昼休みまで犬猫鳥を探しながら（やっぱり仕事だし）、美穂を待ち、会社から出てきたら後を追う。
うん。我ながらなんとも都合の良い計画だ。無理があるにも程がある。

でも、やるしかない。

俺はこのとき美穂とアイツが会ったらどうするか、全然考えてなかった。

美穂に問い詰めるか、アイツを一発殴るか。

しかし結局どっちも出来なかった。

何故なら全て彼女がしてくれたからだ。

昼時、たくさんの人が俺の前を歩く。

俺は会社から出てきた美穂を見逃さなかった。

後をつける。

探偵として働いて三ヶ月。なかなか自分でもさまになってるんじゃないかと思う。

誰かの背中を見つめて後を追う。

美穂はどんどん先へ行く。

美穂は駅前の公園に入っていた。

公園にはアイツがいた。

美穂は名前を呼んでアイツに抱きついた。

俺の胸がぎゅっとなった瞬間、俺が何かを叫ぶ前に、アイツの後ろから出てきた彼女が美穂の頬を叩いた。
パチン。音が聞こえた。

「美穂!!」

俺は叫んだ。美穂が殴られて俺は何かを思う前に駆け寄った。

「健一! どうして」

美穂は頬を押さえて涙を溜めていた。

俺は美穂を抱きしめた。

「あなたって人は、彼がいるのにユウくんの手をだしたんですか?」
「!」

小さくて髪が長い彼女が目吊り上げて怒っていた。

「サイテー。信じられない」

ユウくんと呼ばれたアイツは困ったように彼女をなだめていた。

「そうだ、美穂。コイツは誰だよ?」

「ユウくんヒドイよ。信じてたのに!」

「殴るなんてサイアク! イタイイ」

「大丈夫か? でも状況を説明してくれ」

「でもって何? 普通は私の心配を真っ先にするもんじゃないの?」

「殴られて当然です! ユウくんにフタマタかけてたんだから!」

「フタマタしてない!」「姉貴なんだよ」

美穂とアイツの声がかぶった。

公園は一瞬だけ静かになって、「えー!!」と言う彼女の声が響きわたった。

美穂の弟の佑太くんは大学生で、今年から校舎が変わりこつちに引っ越してきた。

アパートと美穂の職場が近いことを知り、美穂にお昼ご飯をねだるようになり、週に二回はご馳走になっているらしい。

ちなみに昨日はたまたま会って、今日のお昼の約束をした。

「大学生はお金がないんだってー」

美穂は言った。

美穂は佑太くんに彼女がいることを知り、意地悪のつもりで佑太くんに抱きついたり、腕を組んだりしていたらしい。それを友達が見て、佑太くんの浮気を疑い、彼女は佑太くんの後をつけてきたらしい。

「だって佑太に彼女って、笑えるんだもん」
美穂は言った。

「ごめんなさいごめんなさい!!」
事実を知った背が低く髪が長い佑太くんの彼女は、壊れたくるみ割り機のように頭をぺこぺこ下げて謝っていた。

「姉貴が悪いんだからな」
佑太くんは言った。

「だって最近、健一がかまってくれないんだもん」

「あ」

一匹の三毛猫が鈴の音とともに側を走り抜けた。

「みーちゃん!」

俺はみーちゃんを追いかけて走り出した。

「みーちゃんって?」

後ろから美穂が慌ててついてくる。

「探してんの! 仕事!!」

俺は怒鳴るように走りながら答える。

みーちゃんは公園の草むらに飛び込んだ。

俺も服が汚れることはお構い無しで、頭から草むらにつっこむ。

「こんなこともしてるんだねえ。探偵って」

俺がみーちゃんを捕まえると、感心したように美穂は言う。

「知らなかった」

振り返ると、驚いたように見ている佑太くと小さくて髪の高い彼女は、手をつないでいた。

電話が鳴った。

「お昼に一回戻れって言ったのに何やってんの！ 佐々木くん」
社長はたぶん、電話の向こうでにやにや笑っている。

俺の大事件はこうして幕を閉じた。

俺はいつものように犬猫鳥を探し、人を尾行する毎日だ。
ただ変わったことは美穂が俺の仕事に時々ついてくるようになったことだ。

犬猫鳥の探索はありがたいが、尾行について来て俺の尾行に文句を言うのは勘弁してほしい。

「健一！ 尾行って相手の靴を見ながら追うんだよ」
「何で？」

ピンクのミニスカートのオバサンの後ろを見ながら俺たちはヒソヒソと話す。

「相手が振り向いたら目が合って、気づかれちゃうじゃん」

「ああ、そうか」

オバサンがタクシーに乗る。

慌てて俺もタクシーを捕まえた。

「健一ってまだまだ見習い探偵だね」

見つからなければ何でもいい。そう社長は言ってたぞ。

「お前、もう仕事に戻れ」

「はい」

「私の誕生日、覚えてるでしょうね」

美穂が思い出したように言った。

「覚えてるよ」

タクシーに乗り込み、美穂を見ると「ガンバレ」と小さく手を振ってくれた。

タクシーの中で考えた。

仕事は今でも嫌なときがある。

人の秘密を探る。人の隠し事を暴く。

時として人は、大切な人を平気で裏切ったり、騙したりする。

誰かを陥れるために素行調査を依頼する人がいる。

でも例えペットでもいなくなれば眠れなくなるほど心配し、必死で探し回る人もいる。

うんざりすることが多いが、誰かのために涙を流す人を見るとやっぱり心が温かくなる。

この仕事は意外に俺に合っているのかな。

美穂は子供っぽいところがあるし、俺も思い込むとなかなか意見を变えられない。

すれ違うことも多い俺たちだけど、楽しくやってる。

美穂が俺の仕事を受け入れてくれたから。

俺が美穂の事を考えるようになったから。

会えなくなっただけじゃないじゃん、なんてもう言わない。

俺の仕事は誰かの後ろを追うことだ。

捕まえるために。知るために。

前を走っていたオバサンのタクシーが止まった。

俺は「止めてください」と運転手さんに言った。

お金を払うと

「事件かね」

とニヤリと笑われた。笑い方が社長に似ていた。

（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

実際の探偵業と違う部分があると思います。

想像で書きました。

問題点の指摘お願いします。

ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2012p/>

見習い探偵 佐々木健一の大事件

2010年11月29日00時33分発行